



携帯QRコード

会報誌 **有縁千里**

うえんせんり Vol.29

今回の特集

- ・ 青山俊董老師記念法要・記念講演
- ・ モノとコト
- ・ 第14回有縁会のお知らせ
- ・ 本のプレゼント

 **西村交益社**
 株式会社 <http://www.koekisha.info/>



過日、研修で箕面に泊まりました。関西人なら誰でも口ずさめる、あの、CMの「箕面温泉スパーガーデン」の箕面です。CMのフレーズは強烈で、幼いころからずっと頭に焼き付いていました。(現在でもサンTVの阪神戦の折に放送されているらしく、我が家のトラキチどもは当然のように口ずさみます。)

研修仲間が早朝、滝までの散歩に誘ってくれ、軽な気持ちで向いました。道中、シヨギングをする人、散歩をする方、散歩する犬と、ひっきりなしにすれ違い、都会は山道でさえ、人の往来があるなあ、なんて思いながらのんびり歩いていました。が…滝が見えない。登っても登っても、つづら折りの坂道を何度曲がっても、道は続き…結局、滝壺に到着したのは歩き始めてからおよそ半時間後、約二〇分の道でした。

そう、あのCMには、箕面滝が映し出されていません。そのため、私はずっと温泉の隣に滝があると錯覚していたのです。

旧陸軍中野学校では、情報は三種類あると教えています。

甲情報：自分自身が、自分の目や耳で直接見た聞いた情報。

乙情報：自分の信頼する人、その人自身が、直接見た、聞いた情報。

丙情報：それ以外の全ての情報。新聞・TV等

情報として採用してよいのは甲乙情報まで。丙情報に惑わされることなく、直接、自分の手・足・口を使って、情報を集めることに加え、信頼できる人間関係の確立が重要であると教えています。

日常生活の中で、思い違い、勘違いしていることは、至る所にあります。日々の新聞やテレビで得た情報を、鵜呑みにせず、いくらか斜めから見ようとしても、それ自体が丙情報なら、ある程度睡ものである。と、時には邪推する必要があるのかもしれない。さしずめ、箕面滝の情報は私にとっては丙情報であったのです。

ところで、この「有縁千里」は、皆様にとって何情報にあたるのでしょうか。情報なり情報のか…あるいは、丙情報の垂れ流しか…それだけは、避けたいのですが…



不要の方はお手数ですが下記迄ご連絡ください。今後一切送付しないよう致します。TEL 079-662-5909

創業五十周年記念法要&記念講演

思いもかけぬ縁により、青山俊董老師に、記念法要の導師をお務め頂くことができました。当日は台風の影響で雨風が強かったにもかかわらず、多くの方にご参加いただき、ありがとうございます。

老師が入堂された瞬間、空気がピンと張りつめ、何か大きな力が動くのを感じ、体が震えました。

ここでは、法要の時間にお話しいただいた法話をご紹介します。

大金持ちのご主人が亡くなってお通夜を頼まれた一休禪師、亡くなったご主人の枕元に憤然とお座りになったまま、いつまでたってもお経を始められない。かしまって、後ろでお参りしていた人達が、とうとう痺れを切らしまして、禪師様はいつになったらお経を始められるだろうと、ぼそぼそ言い出しました。その声を聞いた一休さんが振り向いて、「ご主人が一生涯愛用していた金槌を持ってきてくれ」とおっしゃった。「お通夜の経読みの日に、何で金槌があるんかいなあ」と思ったけれども、ご主人が生涯使っていた金槌を持ってきて、差し上げた。一休禪師はその金槌を受け取るや否や、亡くなったご主人の頭をバンと叩いたんですね。皆びっくりにして、「いくらに禪師様と言え、亡くなった主人の頭を叩く法がない」と怒り出しました。その時禪師が、お尋ねになった。

「亡くなった主人は私に頭を叩かれて痛いとお申しませんか？」誰も返事ができませんで黙っております。そうしたら、禪師様、「仏の教えというのは、生きている内に聞くもんじゃない。一生涯愛用していた金槌で、自分の頭を叩かれても痛いとも言えなくなってからでは、遅いのじゃ。」そうおっしゃってお経も読まないで帰っていったというエピソードが残っております。

NHKチーフディレクターの、金光寿郎という方が中心となつての勉強会で、「一偶会」というのがあります。伝教大師が「一偶を照らすものこれ国宝なり」ということをおっしゃってますが、その一偶をとって「一偶会」という名前を付けた勉強会であろうと思います。少し前ですが、頼まれて、お話に参りました。話終わりましたから、一人の方が質問の手を挙げました。「お経は死んだ人に読むものですか。生きている自分の足元に向かって読むものですか。」いい質問ですね。私は当然、我が足元に向かって読むものだとお答えをいたしました。

少し話がそれます。

私は、もうちょっとで八十に手が届く歳になりました。還暦の年となると随分遡りまして恐縮ですが、私の誕生日が一月十五日で、かつては成人式でございました。この日、私は長野県の塩尻にありました。そちらにお茶の生徒がたくさんおりまして一月十五日は初釜を毎年して

おります。生徒のために一日、お濃茶が出る訳ですがお濃茶を練りながらこんな歌ができました。

還暦の 峠を越えて、
新たなる、

また旅立ちをするぞ、嬉しい

人生に退職はありません。最後まで本番、最後まで本番、最後まで仕上げ時。先達が残してくださった教えを学ぶのに時間が足りない。よしやるぞと、私なりに二度目の暦の旅立ちをいたしました。居合わせた生徒にこの歌の紹介いたしましたね。

しかしながら正直申して、一年半ないし、二年先まで、ほとんど日程が一杯でございまして、風邪ひき日程というのは作らないものですから、風邪をひいても、無理をしてしまいます。還暦の年の六月、とうとう肺炎を患いまして、どうにもならず医者へ行きました。



叱られて、すぐ入院と言われたのですが、一日置いて講演があり、一日置いてまたあり、原稿締め切りもありました。とても入院している暇が無くて、「おとなしくしているから帰してくれ」と頼んで、名古屋の道場で皆に迷惑をかけながら、半月ほど休みました。その時、信州のお茶の生徒が心配して、いくつも見舞いの手紙をくれた中に、こういふのがありました。

還暦の峠を越えて二度目の暦の旅に元気に旅立たれた先生が肺炎で一服ですね、ゆっくり休んでまた元気になって旅を続けて下さい。

と書いてあった。咳や熱で寝れないままにその手紙を思い返して、こう思ったんですね。一服ではない。これが人生の景色だ。最初の六十年は一家の主人公としてあるいは主婦として忙しく、それなりに生きがいもありました。忙しさにかまけて、足も心も宙に浮きかねません。

二度目の暦の旅は、一応第一線から一歩ひいて、自分自身と向かい合う時間が多くなりました。その代わりに生老病死という言葉で一生を表すならば、老病死という景色が頻繁に出てくるのが、その旅の景色でしょう。むしろ、老いを見据えて人生を深め、病を見据えて人生を深め、死を見据えて人生を深める。深めるという点では、はるかにはじめ健康のありがたさも分かる。

いかなる老いが来ようと、いかなる死が来ようと、全てお任せ、頂戴していく世界ではありませんが、願いとては、老いの「化」の上に草かんむりをつけたらいいなと。分かりますか？ 化の上に草かんむりつけたら花になりますわな。老いたるは、なおうるわし。そんな歳とり方ができたらいいなあ、そんな返事を書きました。



その年の半ばでしたか、地元の老人クラブが研修に来たので、この話をしました。その中に八十代の男性で音楽に携わる方がおられました。その方が、私のこの歌を作曲をして、楽譜に写して送ってくれたんですが、音楽の素養のない私は楽譜を見ただけでは分からないのですね。困ったなあと思いつつ、忙しさにかまけて、返事も出さずに一ヶ月が過ぎました。

そしたら、催促の手紙が参りました。真土の土産にしたいから何とか言ってくれと。それから、お茶の稽古場で生徒に「誰か弾いてくれないかね、誰か歌ってくれないかね」と頼んで、ようやく分かりました。これは大事なことでございましてね。作曲家が、名曲を残して楽譜に写しても、私のように音楽の素養のない者は分からないのです。楽譜が書いてあるばかりにメモ用紙にもならんわな。そんな私でも生演奏にあうと感動があります。楽譜というのは間違いのない生演奏を導くための楽譜。

演奏して初めて命が与えられる。命の与えられるところに感動を呼び起こす。感動と感動の輪ができる。

それはお釈迦様という、親鸞様という、道元様という、世に類いないお方がお出まし下さって、天地宇宙の真理を、その中に生かされてる人の命の姿というものを、見付け出し目覚められて、それを人の言葉に託して語られると。

天地宇宙はこうなっているんだ。その中で人の命はこのように生かされているんだ、だからその生かされている命にふさわしいような生き方をしようではないかと教えを説かれる。そのお釈迦様や祖師方を作曲家に例えたら、そこに説き出された教えは、楽譜にあたりませう。それを文字に託したものが、お経でございます。他ならぬ楽譜にあたる訳です。



天地宇宙の真理。その中に生かされている人の命の姿。それに目覚め、発見された、尊い方々を作曲家に例える。「こうなっている。だからこう生きて行くんじゃないか」と人の言葉を借りてお説き下さる。そこに教えが生まれる。それを文字に託したものだ。それがお経でございます。それが楽譜にあたる訳です。他ならぬ、たった一度の命の今をどう生きてらいいのか、その最高の生き方を、お説き下さったのが、お経に他ならぬ訳です。たった一度の命の今を具体的にどう生きてらよいか、生演奏の手引きとしてお書き下さったのがお経なんだということがこれでお分かりかと思えます。漢文のままですと読まれると少々難しいけれど。ということ、今のおしゃべりは楽譜の解説と思っただけです。

一句でも半句でもなるほどと納得したならば、毎日の生活の足元に照らし返していただいて、その楽譜に導かれて二十四時間の生き方の、この生演奏に照らし返していただくと、それが回向(えこう)はめづらし手回けて亡き人への供養になる。これが本当の供養でなきゃならぬのでございませうね。

供養という言葉に五供養という言葉がありませんね。今、お焼香をしていただいたと思えますが、お香・お灯明・お花・飲み物・食べ物五つを五供養と申します。皆様それとなくおつめいただいていると思えますね。お香とお灯明とお花と飲み物と食べ物。これももちろん心が無ければできません。でも、お釈迦様が大事におっしゃったのは、

「良き生き方をせよ。」と。

これが一番の供養だとおっしゃった。先に逝かねばならなかったお方が、喜んで下さるような、後に残った者の生き方をする。「ああ、よくやってきている」と安心して旅が続けられるような、安心して眠ることができるような、後に残った者の生き方をする。その最高の生き方が説かれてあるのが、他ならぬお経でございます。具体的な我が足元に照らし返し、それに導かれて、一瞬でも一時間でも一日でも、より多く教える生演奏の生き方ができる。それが、亡き人が喜びことであり、亡き人への、本当の供養です。

回向というのは、「めづらし手回ける」と書きまします。そこおぼし召していただくことが出来ればいいなと思えます。本当の意味で、お経とは何なのか、供養とは何なのかということ、この機会にまた再考、自分に確かめることがお互い「できれば有難いことと思えます。」

大変ご無礼なことを申し上げまして、お話にかえさせていただきます。ありがとうございました

午後からは長寿の郷に会場を移し、「仏のいのちを生死する」と題して、お話しいただきました。

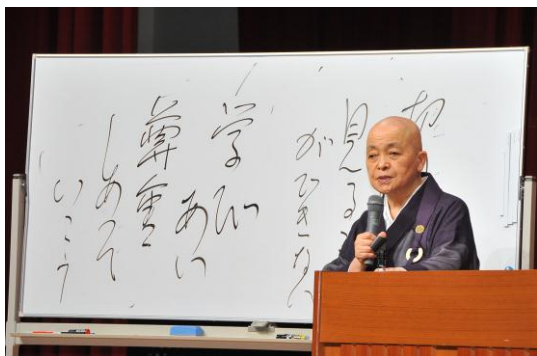
青山老師の話を聞くため、わざわざ名古屋からお越し頂いた方もありました。ファンと言っては、失礼かもしれませんが、多くの方に「先生にお会いできて、先生のお声を聴けて、本当に嬉しかった。このような機会を作ってくれてありがとう」と声をかけて頂き、こちらの胸も熱くなりました。

講演の内容をご紹介します。

「ご縁が重なりまして、ご一緒のお勉強の時間ができたことをうれしく思っております。名古屋の尼庵の修行僧でございます。十五でこの道に頭を剃って入り、そろそろ五十年になります。ある時、名古屋駅でタクシーに乗り込むと運転手さんが私の顔を穴があくほど覗き込んで「坊主やっつてんですか。」と、厳しい口調で言われました。

「たった一度の命の最高の生き方、最後の落ち着き場所、求め求めて行き着いたのがこの姿になったのであって、坊主は職業ではない。」と思わず私もきつく返答いたしました。運転手さんは、「宗教は大嫌いです。宗教は人間が作ったものでしょう。縛られたくない。」と。

宗教は人間が作ったものではない。何もない所から作り出したのなら、二千年前、二千五百年前という時代的制約からもインド、イスラエルという地理的制約からも、出るとは、できないでしょう。お釈迦様やキリスト様が気づく・気づかないに関わらず、発見する・しないに関わらず、行なわれている天地悠久の心理。それをたまたまお釈迦様が明らかかな修行で気づいた、発見しただけなんだと申しました。

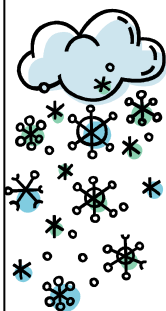


地球が誕生して四十六億年。四十六億年を一年に換算すると地球上に命が誕生したのは、五・六月。海に微生物が誕生した。三十数億年前に誕生した微生物が、限らない進化をして人類という命が誕生したのは十二月三十一日夜十時過ぎ。子宮の中の羊水は海と同じ。命そのものの誕生は三十数億年経っても、条件にかわりはない。そんな地球上において新参者の人類の歴史が四十五万年前。人類が文化らしきものを持ったのがやっと一百万年前。世界三大宗教と呼ばれている仏教が二千五百年前、キリスト教が二千年前、イスラム教が千四百年前。天地宇宙の姿に気づいたのは、ほんの一瞬間。

お釈迦様やらが天地宇宙はこうなっているんだ。その中で人の命は、このように生かされているんだ。だから、こう生きていこう仏教において、仏と一切の存在は、一つ。一つということの分かりやすい例に、私は、まごみちおさんの詩をもちいます。

水はうたいます
川を はしりながら
海になる日の びょうびょうを
海だった日の びょうびょうを
雲になる日の ゆうゆうを
雲だった日の ゆうゆうを
雨になる日の さんざかを
雨だった日の さんざかを
虹になる日の やっほつを
虹だった日の やっほつを
雪や氷になる日の こんこんこんを
雪や氷だった日の こんこんこんを

過去形、未来形、織り成しながら、一つの水が縁に従って、液体であったり固体であったり気体であったりと、いろいろと変化する。具体的な姿をいただくと始めがあって、終わりがあある。でも、なくなったのではない。水からいただいて水に帰る命。どのように変化しようとも水の命に変わりがない。水といふところに永遠の仏の命。元に戻る、これを、「新帰元」「帰命(きみよつ)」という。たった一つの命を縁に従って変わりつつ永遠の命をいただく。



現成公案（げんじょうこうあん）に、

薪は薪の法位に住して、さきありあとありといえども、

灰は灰の法位に住して、さきありのちありといえども、前後裁断せり。

と出てきます。薪は灰になる。灰は薪には戻れない。前後あるわけです。ウバメガシの薪が炭になって、備長炭となる。そのよい炭がよい灰となり、よい糶となる。時間をかけるという縁によって美しく糶変する。切れながら繋がっているんですね。法位というのは、配役です。その時の配役に徹する。こういう命の姿がある。まごみちおさんの水はうたいます、川をはしりながらにもう一度戻りますが、ずっと水が縁に従って変わっていくのをうたいあげて最後のところは

水はうたいます

川をはしりながら

川である今のごんごん

水である自分の 永遠を

という言葉で結んでいます。

変わりつつ永遠の命を生きる命ですが、今の配役方は川なんだというわけなんです。川であるといふところに徹することが水である永遠の命を生きることになったという結んでいます。



私どもの配役にもいろいろある。一生のうちに病気という配役、失敗という配役をいただくなくてはならないこともある。いかなることにいくわそうとも、姿勢を崩さず、そのことに真っ直ぐ立ち向かっていく。それが、前後裁断して今の配役に徹する。法位に徹することになります。私がおんでサインする一しに

投げられた ところで起きる 子法師かな

というのがあります。起き上がり小法師、達磨さんですね。ポンと放り投げられた達磨さん。その場所がごみ溜めであろうと、泥んこであろうと文句なしにコロリと起き上がる。このコロリと起き上がるのが大事ですね。転んだこと、失敗したことが恥ずかしいことではない。失敗したことにこだわって、起き上がれないのが恥ずかしい。まずは、コロリと起き上がる。

その次、転んだこと、失敗したことを一つの跳躍台にして、より強へ、より高く立ち上がれば、もっと素晴らしい。失敗することを通して、失敗した人の悲しみの分かる人間になれば、もっと素晴らしい。さらには、失敗しても落ち込まない、上手くいつてもおぼせあがらない。

松影の暗きは月の光なり。

これも、私がよくサインしているものです。松がそこに立っている、黒い影をひいていることを教えてくれるのは、お月様が出ている証拠。真っ暗闇なら、松が立っていることも、影をひいていることも見えやしません。お月様自体が弱ければ、影も薄い。明るくなるほどに気づかなかつた、自分の中の間違いに気づかせてもらえる。ありがたいことですね。たった一度の命を照らされるお陰、我が非に気づかせていただけるお陰で、たった一度の命を限りなく軌道修正しながら、歩ませてくださいませしょう、という誓願をつけるわけです。

誤解を覚悟で、反論させていただきまずと、まず、「モノ」を購入する前に、よく調べているかです。

自家用車や自宅を購入する時は、価格は勿論、内容に至るまでこと細かく調べるのが普通で、即断即決などまずしないでしよう。家族の「死」は突然訪れるものかもしれませんが、葬儀のことを事前に調べることは、可能です。パソコンを使えば、硬軟清濁ペンキリの情報をこまんと集めることが出来ます。また、事前相談を行っている葬儀社など皆無だとしてもいいでしょう。購入前に情報収集し事前相談を繰り返し、どのような費用で葬儀が形作られているかを、お調べになっているのでしょうか？

また、田舎では考えられないことですが、都会では、我家の菩提寺を知らない方が多いようです。菩提寺は知っていても宗旨は知らない方も少なくない。そもそも家族の誰かに死が訪れるまで、お寺には無縁の方が無数にいます。誰かが亡くなってからお寺を探す。挙句の果ては、安易に葬儀会館を紹介する「お経を読める者」を僧侶としてレンタルする。それはもう、BGMを選んでいようなものです。棺と祭壇を含む葬儀というモノを買い、読経というBGMをレンタル購入するのだから、値段が高いという主張が出てくるのは当然でしょう。

そこには、残念なことに、宗教心や人を送るという思いが見えません。まるで遺体という粗大ゴミの処理であるかのようです。次に、葬儀は「モノ」ではないのです。葬儀とは、一言で言えば、魂をあの世に送る儀式です。仏教では、そんなのです。大切な方を送るという思いがないと、出来ないことです。

そもそもインドでは、僧侶は福田(ふくでん)と呼ばれていました。信者の布施を僧侶が受け取る。僧侶に受け取ってもらうことによって、信者は布施が出来るのです。僧侶は信者が布施の功德を蒔き、福を育てる田地であらねばならないのです。信者の布施は、それを僧侶に受け取ってもらうことにより、初めて布施となるのです。布施は決して葬儀のBGMレンタル料ではないのです。僧侶に行なう布施は料金ではないのです。

購入するという発想では、双方相容れないのは当然です。

勿論、弊社を含め、葬儀に関わる業者として襟を正さなければいけないことは、ごくも有るます。



また、都会には、布施を料金と間違えている宗教者がいる。とも聞きます。会食や満中陰を含む香典返し等をやめれば、葬儀の費用はかなり抑えることができます。また、香典という相互扶助を受ければ、家族の負担する費用も軽減するでしょう。しかしながら、都会では、見栄と後の煩わしさから香典を辞退し、そのくせ、食事は会葬者が少人数になるほど豪華にするという傾向があります。今では懐石はもちろん、フランス料理のフルコースまであります。生きている自分達には手厚く、亡くなった故人には手間も金もかけない、そんな葬儀が増えていると聞きます。

私はお金を掛けるのがよい葬儀だとは思っていません。お金の多寡でよい葬儀かどうかを図ることはできないと思っています。けれど、私達葬祭業者、宗教者、葬祭関連業者は、決して葬儀という「モノ」を売っているのではないのです。あえて言うなら葬儀という「コト」をするお手伝いをしていると考えています。

大切な人を送ることの意味をもっと考えて欲しいのです。もう一つ踏み込んで言えば、自分の子供や孫にとって、良くなる葬儀をして欲しいのです。厚顔無恥のついでに申せば、「子供は親の言うようには育たない。親のしたことをするようになる」と、言うではありませんか。葬儀を買おうとしている御仁、自分の家族に、粗大ゴミのように処分して欲しいのですか？

第14回有縁会 村山順子さん講演会

「今に生きる」

～思い続け、行動し続ければ願いはかなう！

亡き夫からの手紙に支えられ～



とき:2月11日(祝)
ところ:つるぎ会館

健康・生きがい開発財団・生きがいづくりアドバイザー
(有)プロシード(ひまわりサービス)会長・暮らしの学校主宰。
急逝した夫の残した『手紙』に力をもらい、立ち直った経験から、
体験型セミナー『大切な人に素直な気持ちを届ける手紙のセミナー』を主催。起業等をテーマに講演多数。

本の紹介



上田紀行 「ダライ・ラマとの対話」 講談社文庫

六三〇円

十月最後の日曜日、三十年来の思いであったダライ・ラマ法王猊下にお会いできた。

チベット仏教が世界七不思議の一つとして紹介されていた本を小一で読んで以来、そこはいつか行ってみたい場所になった。その夢は未だ果たされずにいるが、ちなみに、先月爽やかな感動を日本に振りまいたブータン王国は、世界で唯一チベット仏教を国教としている



実は、三十年前の初来日時、京都での講演を聞く機会があったのに、生来の怠け癖で、その機会を逸してしまった。それ以来、心に忸怩たる思いをずっと持ち続けていた。
当日、肉眼では豆粒のようにしか認識できない法王猊下であったが、それでも“本物”をライブで見た感動は、私にとっては、提出し損ねていた宿題をやり遂げたような充実感があった。
当日の法王猊下のお話は、とても簡単なものであるとは言えないレベルであった。經典の名前もわからない門外漢には、通訳の方法の不備もあり、良く理解できなかった。ただ、いくつか断片的な事柄が心に留まった。

例えば、「悟りに至るものを妨げているのは、実体に対する囚われ」。或いは、「敵のような存在の人でも、その人に友人がいるということ」は、嫌な人は、条件に依存して嫌な人になっていく。また、「間違った行いは許してはならないが、間違った行いをした人は許さないとけない。愛と慈悲を持って許さなければならぬ」。それから、「心の中がリラックスした状態は、健康に大きな影響力を与える。心を上手に訓練することで幸せな心になれる」などは、ムフと、思ってしまう。そこに、「心になんかの心配もなく、ゆったりとしているのが休息。自分の心の持ち方をリラックスさせ心を休ませる」と言われれば、心の中は心配だらけの自らを省みてしまい、悟りどころか、休息も取れないのかと、暗澹たる気持ちにならなくもない。

まあ、それはさておき、法王猊下来日記念にいくつかの本が出版されたが、これはその類の書籍とは少し違う。講演の法王猊下は、シヨークを連発する優しい方であったが、この本の法王猊下の気迫には圧倒される。宗教とは熱いものなのだ。
右記の本を抽選で三名の方にプレゼントいたします

※切は一月二十日

お知り合いの方で、有縁千里を希望される方があれば、ご紹介下さい。

